



まなび通信

京都府中丹教育局
第187号
令和4年12月6日

「みんなの笑顔」特別支援教育研修会

令和4年11月14日(月)実施

自分の状態を自分で説明できる力
自分が必要とする支援を他者に求められる力

= 『セルフアドボカシー』

「自分一人ですること」と「周りの支援を得てできること」が分かる力であり、何を、どのようにして欲しいのかを他者に求められる力のこと。

「分かる」学び

学びの対象になる事柄を何らかの基準で「分けること」、「分けることができる理由」を明確にすることを学んでいる。子どもたちがその合理的な基準を見出したときに「分かった」と思える。



関西学院大学 菅原伸康 教授

授業づくりには「分かる」学びと「まねぶ」学びが必要

「まねぶ」学び

まねぶは、相手に対する理解から始まる。相手になってみないとまねぶ学びは成立しない。他者になってみる、つまり、まねるということを通して、子どもと先生、子ども同士のつながりが生まれ、「まねぶ」学びになる。

振り返りシートより

- ・「分かる」学びと「まねぶ」学びを意識した授業づくりのお話がとても印象に残った。
- ・障害(しょうがい)のある子どもの問題ではなく、関わる側がどう受け止め、どのように関わるかが問題である。
- ・大切なのは「いつまでに」「何を」「どのように」「どうするか」を具体的に説明することである。
- ・セルフアドボカシースキルを身に付け、自己肯定感や自尊感情を高めていくことの大切さを学んだ。
- ・「学び方が違う存在」という言葉が印象に残っている。将来を見据えた指導をしていきたい。
- ・子どもがうまく理解できない時に、「障害(しょうがい)があるから」とそれを理由にしてはいけないと感じた。
- ・成功体験やほめ言葉が土台となる。もっと授業の内容や関わり方を変えていかないといけないと思った。
- ・私たちの関わり方で子どもの様子が変わると考えると、声のかけ方ひとつにも気をつけたいと思った。

特別支援学級の授業づくりガイド (京都府総合教育センター特別支援教育部)

特別支援学級の授業は、単元や題材があってそこからスタートするのではなく、「子どもの実態」からスタートしてつくっていきます。分かる、できる授業を通して「子どもが変わる」、「子どもが自信をもつ」ことを目指します。子どもの実態から、できたことが実感できる、達成した喜びを味わうことのできる授業デザインが大切です。

総合教育センター-ITECより
ダウンロード可 →→→



(学校サポート訪問で提出いただいた) 指導略案の例

- ・児童生徒の実態(学級全体)が記載されている
- ・本時の目標、ねらいが個別に記載されている
- ・本時の展開の中に、一人一人の活動の内容や活動の際の留意点、個に応じた指導が記載されている
- ・評価が一人一人、個別に作成されている

授業者は、児童生徒の実態把握ができています。
授業者は、授業の流れがイメージできています。
授業者は、いつどこでどのような支援をするのか分かっている。
児童生徒は、授業内容が分かる。
児童生徒は、達成感を持ちながら充実した時間を過ごしている。

児童生徒の学びにくさの改善につながり力を伸ばすことができる！
オーダーメイドの学びで、児童生徒の「分かった」「できた」が増える